

小特集②

ロシアのパンク・バンドの教会侵入事件とその余波

— 政府への異議申し立てか、「聖なるもの」の冒涇か —

はじめに

2月21日、ロシアの女性ロックバンド「プッシー・ライオット (Pussy Riot)」が、モスクワの救世主キリスト大聖堂に許可なく侵入し、プーチン政権を批判する自作の曲を演奏した [→ラーク便り55号40頁参照]。これは、3月4日のロシア大統領選挙を前に、ロシア正教会最高指導者のキリル総主教がプーチン氏支持を表明し、反プーチン勢力を「西洋の物質文明を崇敬する、ロシアに対する脅威」と非難したことへの抗議であった [→ラーク便り54号45頁参照]。彼女らは「フーリガン行為」(騒乱罪)の容疑で逮捕され、主要メンバーの3人は、2012年9月末日の段階で獄中にある。本件は欧米各国で報じられ、国際的な著名人によるプーチン政権批判およびバンド・メンバーへの支援・支持は日に日に高まった。

他方、本件が政治問題として扱われ、耳目を集める陰で、ロシア正教会の総本山の教会の祭壇に上がり、祈祷や聖歌を一部パロディ化した曲を歌い踊ったことの持つ宗教的な意味は忘れ去られていった。

1. 事件の概要と同バンドの主張

「プッシー・ライオット」は2011年8月に結成されたパンク・ロックのバンドで、男女同権、環境保護、反権力を主張し、公共の場での許可なしライブを繰り返してきた。1990年代にフェミニズム運動を盛り上げた米国のパンク・ロック・バンド「ライオット・ガール」の影響を受けたものと見られる。メンバーは歌ったり、演奏したりする約10人と、動画撮影などの裏方約15人から成り(毎日8/27)、20代の若いメンバーが多い。ライブの際にはカラフルなワンピース・タイツ姿にトレードマークとなった覆面を身に付け (SANKEI EXPRESS 4/16)、素顔や素性は隠されているが、メンバーは大卒の社会人で (毎日8/27)、本業は記者や写真家、教員等との報道もある (朝日8/17)

2月のライブの様子は、YouTube等の動画サイトで閲覧することが出来る (Pussy Riot in Russian Orthodox Churchなどのキーワードで検索可)。メンバーは警備員の制止をよそに、一般の信徒の立ち入りが禁じられている祭壇に登り、イコン(聖画)の前で歌い踊った。歌詞を訳せば、概ね以下ようになる。ひざまずき、十字を切りながら聖歌のパロディの詞を歌うパートと、パンチやキックのような動作をしながら、政治的主張を叫ぶパートが繰り返される。

主の御母なる生神女、プーチンを追い払いたまえ、プーチンを追い払いたまえ

黒い僧服 黄金の肩章 信徒たちはへつらい 頭を下げる

自由の幻影は彼の世行き ゲイ・パレードは足枷をつけられシベリアに送られる

KGBのトップ (注: プーチン大統領は KGB 出身)、その最高位の守護聖人は 抗する者を逮捕し、

護送車で連れ去るだろう

最も崇高なる者を愚弄しないように 女は子を産み、慈しんでいるべきだと

(卑語の絶叫を繰り返す)

主の御母なる生神女、フェミニストに成られたまえ フェミニストに成られたまえ

腐敗した指導者らの教会の栄光 黒塗りのリムジンの行進(プロセッション)

学校に司祭が説教に来る 授業に行け、司祭に金を持って行け!

総主教のグンジャエフ(注:キリル総主教の俗名)はプーチンを信仰している

クレイジー! 神を信じたほうがまだましだ

生神女の帯(注:聖遺物と考えられている)はデモより効果的 おとめマリア、私たちと抗議しましょう

(卑語の絶叫を繰り返す)

主の御母なる生神女、プーチンを追い払いたまえ、プーチンを追い払いたまえ

ここで、批判されているのは、(1) ロシア正教会の腐敗(拝金主義、権威主義)、(2) プーチン大統領の圧政、(3) 政府当局とロシア正教会の癒着(公立学校でロシア正教の「正教要理」を教えることも含む)となる。

他方、映像からは、偶然居合わせた信徒の女性らが驚愕の表情を浮かべて立ちすくむ姿や、教会関係者と思われる女性が必死でビデオ撮影を制止したり、信徒らをいたわったりする姿も確認できる。

なお、事件の現場となった救世主キリスト大聖堂は、無神論を標榜したスターリンによって1931年に1度爆破され、ソ連時代には跡地は市営温水プールとして使われていた。1990年に教会がソ連政府に再建を申し入れ、2000年に新しい聖堂が落成、現在は首座聖堂としてロシア正教会の総本山の役割を担っている。社会主義期に奪われた信仰の自由を取り戻したことの象徴という意味で、ロシア正教徒の思い入れが強い場所でもある(SANKEI EXPRESS 4/16)。

2. 異例の長期拘留と裁判

7月20日、モスクワ地裁において本件の初公判が行われた。起訴された3人のうち2人には幼い子供がいるため、弁護団は保釈か自宅軟禁を要求したが、検察側は逃走の可能性や虞犯を理由に拘留継続を主張した(SANKEI EXPRESS 7/23)。一般に反政府デモでの逮捕者は数日で釈放されることが多く(毎日8/2)、せいぜい罰金刑か譴責が相当と思われる犯行に対し(SANKEI EXPRESS 4/16, 4/24)、初公判までで5ヶ月を超える異例の長期拘留となった。裁判は非公開で行われ、初公判後には、拘留の6ヶ月延長(2013年1月12日まで)を言い渡したことのみが公表された(東京7/22)。

公判で3人は、自分たちの行為が正教徒の感情を害したことについて謝罪した(毎日8/2)。しかし、「宗教的憎悪に基づくフリーガン行為」との検察側の主張は全面的に否定し、宗教的な敵意はなかったと主張した。逮捕直前に、メンバーの1人は「反プーチン、そして国家と宗教の癒着にも反対する直接行動だ」と説明している(SANKEI EXPRESS 7/23)。後日、

1人の被告の夫はマスコミの取材に対し、キリル総主教のプーチン氏支持表明のほか、聖堂内に有料のサウナやパーティ会場があるなど、教会の商業主義が過ぎることを指摘し、「教会の政治介入や金もうけが許されて信者を侮辱することにならないのなら、『パンク祈祷』だって許されるはず」と述べた（朝日 8/17）

事件直後、キリル総主教は「許されない神への冒涇だ」と彼女らの行為を激しく批判した。正教会寄りの評論家の中には「不敬極まりなく、3人の行為は火刑に値する」と訴えた者もいた（SANKEI EXPRESS 4/16）。道徳的な観点から不快感を覚えるロシア人は多く（毎日 8/18）、一般の信徒の中からも「宗教を冒涇する行為は絶対に許さない」との声が聞かれた（朝日 8/18）。

一方で、プーチン大統領は6月、デモ参加者の違法行為に対する罰金強化、「違法」ウェブサイトの制限、虚偽報道による中傷への罰則強化などを打ち出し、7月には外国からの資金援助を受けて政治的活動を行うNGOを「外国の代理人」として登録、周知する法案に署名するなど（ロシアでは「外国の代理人」とはスパイを指す語として用いられてきた）、市民の政治活動に大きな制限を加える政策を打ち出した（SANKEI EXPRESS 7/23）。

いつしか3人の裁判は反プーチン派に対する「見せしめ」と言われるようになり（毎日 8/2）、2003年にプーチン大統領を批判し、野党に献金を行ったことで敵視され、「脱税疑惑（本人は無罪を主張）」で投獄されたホルコフスキー氏の裁判になぞらえられるようになった（赤旗 7/30、毎日 8/2）。事件は国際的に「政治弾圧」と目されるようになり、8月2日、プーチン大統領自ら「厳しく裁く必要があるとは思わない」と述べるに至った（毎日 8/4）。

3. 諸外国からの反応

当初より、アムネスティ・インターナショナルをはじめとする露内外の人権団体は、露当局の対応を強く批判した（毎日 8/2）。また、英国の喜劇俳優で作家のスティーブン・フライ氏、米ロック・バンド「レッド・ホット・チリ・ペッパーズ」（朝日 8/3）、英国の歌手スティング氏（毎日 8/8）、英ロック・バンド「ザ・フー」（東京 8/15）、ポール・マッカートニー氏（産経 8/18）など、英米の著名人が露当局を批判し、「プッシー・ライオット」への支持を呼びかけた。

8月6日、コンサートのためにロシアを訪問したマドンナ氏は、「私は表現の自由の制限には常に反対してきた」と述べ、3人の釈放を訴えた（東京・夕 8/8ほか）。同氏は、コンサートで、背中に「プッシー・ライオット」と記された衣装を着用し、「3人の女性は勇敢な行為を行った。彼女たちの自由のために祈りを捧げます」と聴衆に語りかけたという。また、「私は自分の意見を自由に表現できるアメリカからやってきた」と述べ（産経 8/9）、自由と民主主義の大切さを訴えたと報じられた（読売 8/9）。

8月7日、露検察当局は禁錮3年を求刑し（読売 8/8）、8月17日、裁判所は禁錮2年の判決を下した（産経 8/18）。検察側の「ロシア正教に対する宗教的憎悪と敵意に基づき、社会秩序を乱し、正教徒を侮辱した」との訴えを認める判決となった（読売 8/18）。判決の際、裁判官は「いかに信者に精神的苦痛を与えたか」、「いかに教会の規律を乱したか」について3時間にわたり懇々と被告を諭したという（産経 8/21）。裁判所周辺は、開廷5時間

前から治安当局が通行を制限し、支持者ら数百人が遠巻きに見守ったが、人気政治家（野党）のカスパロフ氏など、激しく抗議した60人以上が身柄を拘束された（東京8/18）。

判決を受け、露政府に対する批判は外交レベルにまで高まった。17日、モスクワの米国大使館はツイッターで「不釣り合いな判決だ」と批判（朝日8/18）。追って米務省のヌーランド報道官が「ロシア当局に、事件を見直し、表現の自由を守るよう促す」（読売8/18）、欧州連合のアシントン外交・安全保障政策上級代表が「深く失望した」との声明を発表した（朝日8/18）。市民による抗議行動はニューヨークのほか、パリ、ブリュッセル、バルセロナ、ワルシャワ、キエフ、リガ（ラトビア）など欧州全域に拡大した（東京8/18、読売8/18、産経8/19）。ロンドンでは、ロシア大使館への投石が行われた（Newsweek 8/29）。

ロシアの専門家の佐藤優氏は「この判決にもっとも驚いているのが、ロシア正教会だ。判決の当日、ロシア正教会は、最高指導者のキリル総主教の名で『罪を許すことはできないが、罪人は許すべきである』と恩赦をプーチン大統領に訴えている」と論じた（週刊現代9/8）。しかし、露内務省は、引き続き8月20日、実刑判決を受けた3人以外のメンバー2名の逮捕を関係機関に手配した。先般逮捕された3人は無許可ライブの際に祭壇（立ち入り禁止区域）に侵入していたが、2人はその脇の信徒の立ち入りが可能な場所で歌っていたため、逮捕されなかった（東京8/22）。その後、この2人は国外に逃亡したと報じられた（毎日8/28）。なお、プーチン大統領は10月7日、テレビ番組に出演し、「裁判所は正しい決定を行った。道徳的基盤を損ね、国を破壊してはならないからだ」と述べている（読売10/9）。

その後も、ポーランドの民主化指導者ワレサ元大統領（赤旗9/9）やアウン・サン・スーチー氏（東京・夕9/21）などがメンバーの釈放を訴え、9月21日にはオノ・ヨーコ氏がバンドにレオン・オノ賞を授与するなど（SANKEI EXPRESS 9/23）、世界各地で支援・支持表明が続いている。

おわりに

事件の規模とその後の展開のギャップについて、「本来、女性らの行動に共感する人は少なかったのではないか。（…）ネット上の話題になっても、一般的には『キワモノ』の存在だった。大聖堂での一件にしても、『ばか者だ』（リベラル派識者）という評価が常識的なところだろう」とし、事件は「反対派を極度に怖れるプーチン政権」が作り出したとの見解がある（産経8/21）。しかし、事件後にプーチン政権が打ち出したNGO活動の制限につながる規制の強化には、反対派だけでなく、その後ろに見え隠れする欧米諸国の人権介入に対する恐怖や嫌悪がうかがえる（SANKEI EXPRESS 7/24）。内紛状態に陥ったシリアへの国連制裁決議に繰り返し拒否権を行使する中露に業を煮やした英米等により、本件がロシア批判の国際世論を形成するために利用された面も否定できない。「聖なるもの」への冒涇を問題とした事件は、当事者のロシア正教会を置き去りにし、急速に国際政治の文脈の中へと飲み込まれていった。

[文責：加藤久子]